

絵本から学ぶ保育者論

— 授業実践報告 —

梨 本 竜 子

The nursery teacher theory learned from a picture book - Class practice report -

Ryuko Nashimoto

1 はじめに

今年度より幼児教育学科で「保育者論」の科目を担当するにあたり、授業の始めに毎回1冊ずつ絵本を読むことにした。一般的に保育者養成課程において絵本を教材とする場合には、子どもに読み聞かせるためのものとして扱われることが多いと考えられる。確かに絵本は子どもの心を育む重要な児童文化財であり、保育者の子どもへの読み聞かせは保育に欠かせないものとなっている。しかし、絵本は子どものためだけのものではない。作家の柳田邦男は、その書『生きる力、絵本の力』の中で、絵本は「読む人の年齢や人生経験に応じて、深い語りかけをしていく不思議な可能性を秘めている」¹⁾ のものであるとして、大人が絵本を読む意義について述べている。また、絵本には保育に通じるものが数多く含まれている。これについて自らも保育者であった吉村真理子は、自著『絵本の匂い、保育の味』において次のように言っている。「絵本は、子ども理解、人間理解は言うに及ばず、保育の原理や方法論、保育者論、環境論、母親や家庭の問題、保育の目的や内容に関する様々なヒントを与えてくれるものである。絵本は、まさに保育学の宝庫といってもいいくらいである。」²⁾

「保育者論」は、保育士養成課程においては「保育の本質・目的に関する科目」の1つとされており、幼稚園教諭免許取得のための「教職の意義等に関する科目」にもあたる。その教授すべき内容は、保育者の制度的位置づけのみならず、保育者の役割等多岐に渡る。しかし、受講学生（1年次後期）は、保育の場での経験はもとより、子どもとのかかわりも少ない者が多数おり、テキストや講義の内容についてイメージしづらいことが予想された。そのため、授業の始めに毎回その回の授業内容と関連付けた絵本を読むことによって、多少なりとも学生の子どもや保育、保育者をイメージする助けになればとの思いがあった。また、絵本を通して子どもを理解し、子どもにとって大切なことは何かを考えるきっかけになることを期待した。さらには、絵本に登場する大人、保育者の子どもとのかかわりについて、主人公の思いや行動に自身を重ね合わせることにより、一人ひとりの学生が自分のなりたい保育者像を描いていくことができればと考え、授業に絵本を導入することを決めたのである。

本稿は、絵本を「保育者論」の授業に導入することで、学生に子どもや保育をイメージしやすくすると

ともに、保育者としての感性を高めることを目的とした授業実践の試みの報告である。

2 概要

- ・対象：新潟県S大学短期大学部幼児教育学科1年生 130名
- ・時期：平成27年10月～平成28年2月
- ・方法：毎週1回の90分授業（全15回）の冒頭（5～10分程度）で、OHCを用いて各回概ね1冊の絵本を授業担当者が読み聞かせる。
- ・使用テキスト：汐見稔幸・大豆生田啓友編『最新保育講座2 保育者論』ミネルヴァ書房、2010

3 実践内容

(1) 『えんそくバス』中川ひろたか（文）・村上康成（絵）童心社

初回の授業テーマは「師とは何か」である。

この絵本に登場する「園長先生」は、前日に子どもたちに遠足の注意をしていたにもかかわらず、遠足当日自分が寝坊で遅刻してしまい、弁当まで忘れてしまう。それに対して子どもたちは、それぞれに自分の弁当を分けてあげるのである。

子どもにとっては「なんだ、大人でも、園長先生でも失敗するんだ」というところが面白いのであろう。保育者も人間であり、失敗はあって当然である。学生が「優れた職業人」としての保育者像を学ぶばかりでは、生身の人間としての保育者からかけ離れてしまう。とかく学生は実習で失敗を恐れがちである。しかし、保育者の失敗が直ちに子どもたちに悪い影響を与えるばかりとは限らない。この絵本の子どもたちには、しっかりと他者への思いやりが育っているのである。絵本を通して、何かを直接的に教えることが師という存在の本質ではないことへの気づきを促す。学生には読後、なぜこの園長先生は子どもたちに好かれているのかという問いを投げかけた。子どもは人の本質を見抜く力を持っているのである。

作者の中川ひろたかは、男性として日本で最初に保育資格を取得し、保育園に5年間勤務した。村上康成の描く絵の園長先生の風貌は中川をモデルにしている。そうした絵本の周辺情報も伝えることで、学生の興味・関心が広がるようにした。

(2) 『せんせい』大場牧夫（文）・長新太（絵）福音館書店（絶版）

第2回の授業テーマは「保育者になるということ」である。

この絵本では、子どもの目線から見た保育者の姿がよく描かれている。遊びの中では「せんせい」は馬やお相撲さん、鬼にも狼にもなり遊んでくれる。具合が悪くなれば看護婦さんになり、お父さん、お母さんにもなる。そして、本当のお母さんでもあり、子どもでもあるところに不思議さを感じるのである。保育者は多様な表情や役割を持ち合わせ、使い分けている。子どもは「せんせい」に友達のような親しみを感じながら憧れも抱き、尊敬もしているのである。

作者の大場牧夫は40年近くに渡り、桐朋幼稚園で教諭の職にあった。その間数々の大学・短期大学で非常勤講師を務め、日本保育学会で理事を歴任したが、信念である「生涯学級担任」を貫き通したとされている。池田（2009）は、本書で表現された保育者の役割は、現行の「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」の趣旨に沿うものであると分析している。「幼稚園教育要領」では、第3章において「幼児の主体的な活動を促すためには、教師が多様なかかわりをもつことが重要であることを踏まえ、教師は、理

解者、共同作業など様々な役割を果たし、幼児の発達に必要な豊かな体験が得られるよう、活動の場面に応じて、適切な指導を行うようにすること」とされている。大場は別著『幼児教育の基本を考える』において、保育者も重要な環境の一つであるという「保育者環境論」を唱えているが、この絵本でもそれが表されているといえよう。

(3) 『こぶたほいくえん』 中川李枝子 (文)・山脇百合子 (絵) 福音館書店

この回の授業テーマは「保育者の一日」である。

この絵本は、初めて保育園に入ることになった3匹のこぶたの一日を通して、入園時の子どもの驚きや不安、それを乗り越えて慣れていくまでの姿を描いている。やんちゃな3匹は、母親が恋しくなり泣いてしまうが、保育者や友達と出会い、得意なかけっこを存分にできたことによって「ほいくえんだいすき」になっていくのである。

園生活の何気ない一コマが、いきいきと鮮やかに描かれている。この保育者は、3匹がかけっこが好きなことを知っていて誘いかけたのではないだろうか。園がその子の居場所になり、子どもが自分らしくいられるためには、好きな遊びを存分にできることが必要である。遊びを支える保育者の役割は大きいことを学生に感じて欲しい。

作者の中川李枝子と山脇百合子姉妹の『ぐりとぐら』シリーズはあまりにも有名である。中川は保育者として働くかわら創作活動を続け、退職後は著作に専念している。同姉妹による『いやいやえん』もよく知られた童話であるが、どの作品にも大人に都合の良い「いい子」ではなく、等身大の子どもがそのままに登場していると感じる。

(4) 『ようちえんいやや』 長谷川義史 (作・絵) 童心社

この回の授業テーマは「子どもの思いや育ちを理解する」である。

子どもにも、「今日は幼稚園に行きたくない」という日がある。「あいさつするのいややー」「ももぐみやからいややー」と、登場する6人の子どもがそれぞれに言うあれがいやこれがいやという理由は、大人から見れば些細なことであっても、本人にとっては切実である。最後に全員が声をそろえていう「おかあちゃんと一日いっしょにいたいただけなんやー」には、誰もが共感するところであろう。愛する家族の傍にいたい気持ちはわがままではなく、素直に愛おしいと思える気持ちである。最後のページでは、泣いていたことも忘れたかのように全員が元気に笑顔で遊んでいる。

子どもの思いに寄り添うことは保育者の基本である。保護者と離れて不安な中、泣きたい気持ちにも共感したいものである。

この絵本では、全編に渡って長谷川の出身地である関西弁が使われている。そのことが、豪快な泣き顔の絵とともにコミカルさを感じさせ、笑いを誘うのである。長谷川は全国各地で絵本ライブを行い、「ようちえんいやや」の自作の歌も披露している。

(5) 『はけたよはけたよ』 神沢利子 (文)・西巻茅子 (絵) 偕成社

この回の授業テーマも前回と同じく「子どもの思いや育ちを理解する」である。

たつくんはひとりでパンツをはこうとするが、なかなかはけない。嫌気がさし「パンツなんかはかないや」と外へ飛び出したたつくんだが、ふとした拍子にパンツをひとりではける方法を見つける。そして、おかあさんが作ってくれた赤いズボンも自分ではいたたつくんは、誇らしげに動物たちに見せに行き、うらやましがられるのである。

たつくんはパンツを「はきたくない」といいながらも、本当は「自分ではきたい」のである。試行錯誤の後に自分でできるようになるという体験は、自信と誇らしさにつながっていく。

この話は、絵本、童謡、童話の世界に優れた作品を数多く残している神沢利子が、自身の幼少期の体験を基に作ったという。40年を超え愛され続けている絵本は、普遍的な子どもの姿を描いているといえよう。

(6) 『トーマスのもくば』小風さち(作)・長新太(絵)福音館書店(絶版)

この回の授業テーマも引き続き「子どもの思いや育ちを理解する」である。

木馬が大好きなトーマスは、幼稚園の木馬をいつも独り占めにしている。誰にも木馬を貸さないトーマスは、ある日馬になってしまいが、悲しむどころか馬になりきって楽しむ。先生は「まあ、いいでしょう。馬の子だって子どもは子ども」と、トーマスを温かく受け止めるのである。

トーマスのような子をいわゆる「困った子」と捉え、保育者は「10数えたら替わるのですよ」などという指導をしがちである。しかし、「満足するまで乗りたい」という気持ちは傲慢や利己主義などではない。子どもは自分の思いを満たされて、初めて相手の気持ちに気づくことができる。まずはその子の思いを十分に満たすことで、他者に替わりたいという気持ちが生まれるのである。絵本の保育者は1場面のみ登場し、せりふも1か所だけであるが十分な存在感を示し、その保育観が伝わってくる。

迎える時間になったトーマスは、馬になった自分を母親に否定されるのではないかと恐れる。ここでトーマスは「木馬に乗りすぎた」と反省し、泣きそうになっている。母親は「まあ大変」といいながらも「顔を洗ってごらん」と促す。最終ページには文はないが、人間に戻ったトーマスの穏やかな顔が描かれている。長新太の絵が全てを語っており、説明は不要なのである。

作者の小風さちは、福音館書店の社長・会長を務めた松居直の娘であり、ロンドンの郊外で子どもを通わせていた幼稚園での出来事がヒントになっているという。

(7) 『いっちゃんはね、おしゃべりがしたいのにね』灰谷健次郎(文)・長谷川集平(絵)理論社

この回の授業テーマは「子どもの心と体を動かす保育者」である。

使用テキスト中に、この絵本のストーリーのあらましが紹介されていた。幼稚園の新米教諭と、入園してから一度も話をしたことがないいっちゃんとかかわりを描いた物語である。頼りないいくこ先生を励まそうと、いっちゃんは勇気をふりしぼって声を発し、いっちゃんのおかげで、いくこ先生も保育者として成長を見せるのである。

保育では保育者が子どもの心に共感することが求められるが、この絵本の中では、子どもが失敗ばかりで自信がないながらもただひたすら誠実で一所懸命な保育者の姿を見て自分を重ね合わせ、心を動かされる様子が描かれている。経験を積んだ保育者だけが、子どもの心を動かすことができるのではないことを伝えてくれているのである。

作者の灰谷健次郎は、児童文学作家として広く知られている。自らが教育者であった灰谷の作品は、常に弱者に寄り添う教育者としての姿勢が表れている。絵を描いた長谷川集平も、森永ヒ素ミルク事件を題材にした『はせがわくんきらいや』などの社会派作品で知られる作家である。

(8) 『つんつくせんせいととんがりぼうし』たかどのほうこ(作・絵)フレーベル館

この回の授業テーマは「子どもと一緒に心と体を動かす」である。

つんつく先生は、子ども以上に子どもらしい好奇心を持ったおかしな先生である。工作をすれば器用

ではなく、喜怒哀楽がはっきりしている。そんな先生が劇用に作った魔法の帽子をめぐる奇想天外な珍騒動である。先生は自分が帽子を作る時、子どもたちに作らせるためにやっているのではない。本当に楽しんで作っているのである。あるがまま自分らしく、クラスの子どもたちはそんな先生の間味あふれる姿に魅力を感じているのかもしれない。天衣無縫な先生に振り回されながらも、それを一緒に楽しんでいるのである。

作者の高樓方子は、読み手に心を寄せて作られた作品にはぬくもりがあり、読んでもらうことで子どもは自分が愛されていること、尊重されていることを感じるとしている。

(9) 『しろくまちゃんのほっとけーき』 わかやまけん (作) こぐま社

『ゴムあたまポンたろう』 長新太 (作) 童心社

この授業回は「豊かな文化との出会いをつなぐ」がテーマであり、ここでは子どもに向けて読む本としての紹介である。テキストに掲載されていた中から2冊を選んで読み聞かせた。

テキストでは、主人公しろくまちゃんの失敗に対する子どもと大人を感じ方、絵本の捉え方の違いや、長新太のようなナンセンス絵本を読んで絵本に対する考えが変わったという事例などがあげられている。この章を執筆した中村柁子は、絵本を選び楽しむ目は、子ども理解、人間理解に通じるものであるとしている。

それとは別に、『あさえとちいさいもうと』筒井頼子 (作)・林明子 (絵) 福音館書店と『ちからたろう』今江祥智 (文)・田島征三 (絵) について、読み聞かせはしないが、表紙の絵を比較してその印象から作者の子ども観を想像してみるとという検討も学生間でを行った。

(10) 『おおきなおおきなおいも』 赤羽末吉 (作・絵) 福音館書店

この回の授業テーマは「自然との出会いをつなぐ」である。

この絵本は実際に園でよく行われている芋掘り遠足をテーマにしている。雨で延期になった芋掘り遠足にがっかりする子どもたちに、保育者が「おいもはね、いっぱいおおきくなってまってくれるよ」と言ったことから、おおきなおおきなおいもへの子どもたちの想像がふくらんでいく。

芋掘り行事の前後に子どもたちに読み聞かせたい本であると共に、芋を実際に掘ることだけでなく、その体験や行事を子どもとどう楽しむか、どう生活に取り込み遊びに発展させるかという保育実践の様子が、具体的に理解できる。都市化の進行により、子どもの自然体験不足が言われるようになって久しい。保育の日常や行事で自然に触れる体験は、重要さを増しているといえる。

作者は赤羽末吉であるが、鶴巻幼稚園他都内の幼稚園で20年間勤務した市村久子の実際の教育実践を基にして作られた作品である。

(11) 『てのひら』 瀧村有子 (作)・ふじたひおこ (絵) PHP研究所

この回の授業テーマは「保護者や家庭と一緒に歩む」である。

3歳のゆみちゃんは幼稚園に行き始めたが、通園バスが来ても元気がなく、幼稚園でも友達とも遊べない。ママは思案の末、ひとつのおまじないを考えつく。それが、手のひらにマジックで笑顔のマークを描くことである。毎日のそのマークのおかげで、ゆみちゃんはやと小さな声であいさつができるようになる。ある日、ママはスペシャルマークを描く。それは、泣き顔のマークである。ゆみちゃんは「泣いてもいいの？」と驚くが、そのマークのおかげで笑って友達とも遊べるようになるのである。

家庭と違う外の環境になじめない子どもは多い。保育者にとっては子どもたちの入園は毎年のことで

あり、子どもがじきになじむことも経験から知っている。しかし、保護者にとっては子どもと同様初めての経験であり試練なのである。核家族化に伴い、保護者が子育てに不安に陥りがちな現代では、保育者は力強い味方であり、子育てパートナーとなる存在である。子育てを経験していない学生たちが、こうした作品によって保護者の気持ちを知ることは、大変意義深いことであると考えられる。

この絵本は、前述の柳田邦男『生きる力、絵本の力』で、子育てに悩む母親に勇気と感銘を与えた作品として紹介されている。作者の瀧村有子は3児の母であり、自身の子育ての体験を基に作品を作っている。子どもにというよりは、保護者向けの作品ということができよう。

(12) 『さっちゃんのまほうのて』 田畑精一・先天性四肢障害児父母の会・野辺明子・志沢小夜子 (共同制作) 偕成社

この回の授業テーマも引き続き「保護者や家庭と一緒に歩む」である。この回では特に障がいを持つ子の保護者に焦点を当てた。

生まれつき右手の指がないという先天性四肢欠損を負って生まれたさっちゃんが、幼稚園の友達の言葉に傷つきながらも障害を受け入れ、元気を取り戻していく姿を描いている。

子どもが他者と自分の違いを認め、納得して生きていくためには、両親の深い愛情や周りの理解が必要である。そして、保護者の障害受容を支えることも保育者には求められるのである。保護者と共に真摯に障害に向き合い、子どもを支えていくことが保育者の役割である。

この本は、自身も四肢欠損である志沢小夜子が絵本創りの企画を立て、野辺の呼びかけで結成した「先天性四肢障害児父母の会」が絵本作家田畑精一に制作を依頼したものである。志沢はかつて灰谷健次郎の編集担当者であり、その時挿絵を描いていたのが田畑であった。主人公「さっちゃん」のモデルの一人は野辺の娘である。

(13) 『ぐるんぱのようちえん』 西内ミナミ (作)・堀内誠一 (絵) 福音館書店

この回の授業テーマは「職業としての保育者」である。

ひとりぼっちだったぞうのぐるんぱが、ビスケット屋、皿づくり、靴屋といろいろな職業に挑戦しては失敗し挫折を経験して、ついには幼稚園という自分の天職を見つけるというストーリーである。

ぐるんぱは自分の出会った仕事に対し、常に精一杯誠実に取り組んでいる。それでもなお失敗し、転職することになるのだが、その経験は決して無駄ではなく、最後には全てが役立ったのである。様々な職種に真剣に向き合った結果、自分に合った仕事に就くことができたことは、これから社会に出る学生たちへの示唆に富んでいる。

子どもたちに圧倒的な支持を受けるロングセラー絵本である。絵本の発刊50年を記念して、福音館書店のホームページでは、園長となったぐるんぱの続編物語を公開している。

(14) (15) 『ダンプえんちょうやっつけた』 ふるたたるひ・たばたせいいち (作) 童心社

この回の授業テーマは「保育者の専門性」である。

作中のダンプ園長は体格の良い男性保育者である。年長組の子どもたちと手を抜かず力いっぱい真剣に遊んでいる。だから子どもたちは園長に勝てず、いつかやっつけたいライバルだと思っているのである。しかし、決して遊びを誘導したり、強制したりはしていない。子どもたちがルールを決め、子どもが主体で遊ぶのを、一緒に遊びながら見守っているのである。しかも、それぞれの子どもを理解し、必要な体験もしっかりと把握している。保育者が子どもと遊ぶことの意味を教えてくれる作品である。

石巻市のわらしこ保育園での実践報告を基に作られた長編絵本である。東日本大震災の折、実在のダンプ園長（高田敏幸）は命がけで子どもたち全員を助け出したが、園舎は津波により根こそぎ流され、現在は閉園となっている。

4 まとめと今後の課題

以上のように、各回の授業テーマに沿って作品を選び、学生に読み聞かせをした。筆者は学生に、「子どもになって聞くのではなく、今のあなたとして聞いて欲しい」と伝えた。

福音館書店の初代編集長であり、戦後の日本の絵本づくりの先駆者である松居直は、絵本は「読んでもらう本」であるとしている。松居は講義で大学生にも絵本をよく読むといい、学生は、絵本を自分で読むときと読んでもらうときに非常に違う印象を持つという。絵を見ると同時に（絵を読みながら）言葉聞くことで本当に絵本の世界が体験できるというのである。

毎回の授業で絵本の感想を求めてはいないが、その日の振り返りシートに絵本への感想を書いてくる学生もいた。以下は15回の授業終了時に、これまで授業内で絵本を読んできたことへの学生の感想である。

- ・先生が絵本を読んでくださると、何だか子どもの頃にタイムスリップしたようなあたたかく、むずがゆいような不思議な気持ちになる事があります。忘れてしまっていた気持ち・・・絵本の中にはこれから保育者になる私にとっての“気づき”が沢山散らばっていました。
- ・絵本が子どものためだけのものではなく、大人も学ぶことがたくさんあることを知りました。むしろ大人になってから絵本を読んだ方が子どもの頃は考えなかったこと、いろいろと勉強になると思います。
- ・子どものときに絵本を読んでもらったときは、「おもしろかった」と思っていたと思うんです。でもこの授業で先生に読んでもらった時は、こういう保育者もあるんだ、とかこういう保育者になりたいとか、子どもの頃とは違う目線で物事を見るようになったと実感しました。
- ・私は『えんそくバス』が一番心に残っています。保育者は何もかも必ず完璧でなければならないというわけではないと思いました。保育者が困っていたら子どもが手伝おうとしてくれます。でも、それは十分な信頼関係があるからだと思います。保育者が常に子どもに目を向け、子ども優先に行動してきたからこそ、子どもも保育者のために何かしたいと思うのだと感じました。
- ・『つんつくせんせい』『ダンプえんちょう』は特に印象深い絵本でした。先生も子どもたちも一緒に成長している感じがしました。子どもたちと一緒に成長していきたいと思った本でした。
- ・『いっちゃんね、おしゃべりがしたいのにね』の中の“おそらのくもがやぶけようよ”が印象に残っています。新人保育者にとってジーンとくる絵本だと思いました。
- ・『ぐるんぱのようちえん』を読み聞かせしてもらった時に、保育者になるまでの葛藤に似ているなど感じました。『トーマスのもくば』からは子どもに対する保育者や親のかかわり方を学ぶことができ

ました。絵本から学ぶことはとても多かったです。

- ・『さっちゃんのまほうのて』が心に残っています。障がい児保育の勉強をしていることと重なり、すごくリアルで心にじーンとくる内容でした。子どもの頃読んだことがあったのですが、よく意味がわからず終わってしまっていました。今改めて読んで、内容の奥深さや重さ、重要さが身に染みました。

これらの記述から、絵本を読むことで学生が子どもや保育、保育者をイメージできるようにする、子どもを理解しようとするきっかけにするという当初の目的は概ね達成できたように思う。子ども時代の記憶がよみがえったという声や、もっと絵本が読んでみたくなったという意見も多かった。

しかし、授業内容についての理解や学生の感性の高まりにどの程度絵本が資するものであったかの具体的検証はできておらず、それについては今後の課題である。

保育、保育者や子どもとその保護者について学生の理解を深め、自分で考える力を育成することは、容易なことではないと考える。授業担当である筆者の力量不足を、補って余りある力が絵本にはあると実践を通して感じている。

引用文献

- 1) 柳田邦男『生きる力、絵本の力』岩波書店. 2004. p133
- 2) 吉村真理子『絵本の匂い、保育の味』小学館. 1998. p6

参考文献

- 浅木尚実編著『絵本から学ぶ子どもの文化』同文書院. 2015
- 池田邦子「先生って、どんな人？ —保育者・大場牧夫の絵本『せんせい』を学生向け教材として読み解く—」
奈良女子大学短期大学部紀要No40. pp9-17. 2009
- 大場牧夫『幼児教育を考える』ひかりのくに. 1988
- 角野栄子・高樓方子・富安陽子『角野栄子さんと子どもの本の話しよう』講談社. 2015
- 河合隼雄・松居直・柳田邦男著『絵本の力』岩波書店. 2001
- 汐見稔幸・大豆生田啓友編『最新保育講座2 保育者論』ミネルヴァ書房. 2010
- 高田敏幸『天には憧れ地には絆を—ダンプ園長とわらしこに魅せられた人たちの記憶』新読書社. 2014
- 柳田邦男著『生きる力、絵本の力』岩波書店. 2004
- 柳田邦男著『砂漠でみつけた一冊の絵本』岩波書店. 2014
- 吉村真理子著『絵本の匂い、保育の味』小学館. 1998

「さっちゃんのまほうのて」を語る—大人の学校 寺子屋サロン記録—
www.otonanogakkou.org/cont/teragoya-kiroku.htm 2016. 1. 29アクセス

表1. H27年度使用絵本一覧

回	タイトル	作者	出版社・年
1	『えんそくバス』	中川ひろたか（文） 村上康成（絵）	童心社 1998
2	『せんせい』	大場牧夫（文） 長新太（絵）	福音館書店 1992
3	『こぶたほいくえん』	中川李枝子（文） 山脇百合子（絵）	福音館書店 1978
4	『ようちえんいやや』	長谷川義史（作・絵）	童心社 2012
5	『はけたよはけたよ』	神沢利子（文） 西巻茅子（絵）	偕成社 1970
6	『トーマスのもくば』	小風さち（作） 長新太（絵）	福音館書店 1994
7	『いっちゃんはね、おしゃべりがしたいのにね』	灰谷健次郎（文） 長谷川集平（絵）	理論社 1979
8	『つんつくせんせいととんがりぼうし』	たかどのほうこ（作・絵）	フレーベル館 2002
9	『しろくまちゃんのほっとけーき』 『ゴムあたまポンたろう』 『あさえとちいさいいもうと』 『ちからたろう』	わかやまけん（作） 長新太（作） 筒井頼子（作） 林明子（絵） 今江祥智（文） 田島征三	こぐま社 1972 童心社 1998 福音館書店 1979 ポプラ社 1967
10	『おおきなおおきなおいも』	赤羽末吉（作・絵）	福音館 1972
11	『てのひら』	瀧村有子（作） ふじたひおこ（絵）	PHP 研究所 2010
12	『さっちゃんのまほうのて』	田畑精一、先天性四肢障害児父母の会、野辺明子、志沢小夜子（共同制作）	偕成社 1985
13	『ぐるんぱのようちえん』	西内ミナミ（作） 堀内誠一（絵）	福音館書店 1966
14・15	『ダンプえんちょうやっつけた』	ふるたたるひ・たばたせ いいち（作）	童心社 1999